

2025年6月

課題本 『ある行旅死亡人の物語』

武田惇志 伊藤亜衣/著

毎日新聞出版

2022年

◆◆◆6月の読書会から

先月の感想文を読んで、参加者それぞれがどう感じたかを共有しました。幸せ、孤独、作中の登場人物の自死についてなど、いろいろな意見が出ました。

今月の課題本は『ある行旅死亡人の物語』、大金を残して孤独死した身元不明の女性の半生を追った記録です。尼崎で死んだ女性のルーツが広島にあり、2023年広島本大賞を受賞しています。

(文責:森下)

2025年6月竹原読書会『ある行旅死亡人の物語』

(武田惇志・伊藤亜衣 著 毎日新聞出版 2022年)

吉川五百枝

「行旅死亡人」という言葉を度々耳にしていたのは、小学生の頃だったと思う。

1950年代に、兄は社会福祉事務所で仕事をしていた。兄の仕事は、どうも「行旅死亡人」の最期につきあう場面が多かったようで、家に帰ってきても、悲惨な現場を目にした日は、夕食も摂れなかった。まだ終戦の傷を負った時代だったのか、自殺者が多く、鉄道沿線は九州と関西を行き来する住所不定、名前不詳の人が多数あった。

そんなわけで、この題名を見てもだいたいの見当は付いた。「行旅死亡人」の話が、明るい訳はないのに、どんな物語を展開させるのか。いずれにしても、かなり痛々しい話だろうと覚悟をして開いた。しかし、戦後間もなくの、あの息の詰まるような物語ではなかった。悲惨さを覚悟していたので、きれいな物語だと思えたくらいだ。

共同通信社の記者が偶然見た官報の一つの報告。

死亡した一人の女性の戸籍がわからず、係累を探しようもないが、事件性のないことから「行旅死亡人」扱いになったという1件だ。たくさんあるこの種の扱いの中で、目を引いたのは、その所持金の多さだ。現金を34,821,350円所持。

この金額なら、暮らしぶりもどこかに何かの生きた証のような物を残していそうなのだが、何も出てこないという。最後まで、その所持金についての情報は書かれなかった。とうぜん、それについては、読者としての想像はたくましくなる。参加者で話していると、いくつもの新しい筋書きが出てきた。「お金のある行旅死亡人の物語」というのをそれぞれが創作したら、何冊かの新編が作れそうだった。

件の「ある行旅死亡人」とは「タナカチズコ」と記されていた。後に「田中千津子」と判明する。広島市宇品で1945年9月17日生まれ。(実は1933年生まれ)。2020年4月26日に、くも膜下出血により絶命。75才で亡くなっている。

彼女は、戦争末期には、疎開で広島県呉市川尻町小用に住んでいた。国民学校に居る

とき広島市への原爆投下があった。

旧姓は沖宗で三人姉妹(実は四人姉妹)の次女。遺体の身長 133 センチ。右手指全欠損。これは、1994 年 12 月 15 日の労災事故らしい。文化住宅錦江荘の玄関先で倒れていた。年金手帳がある。ここに 40 年ほど暮らしている。独身の様子だったが、1982 年にアパートを契約したのは、田中竜次という人物。しかし、この人物も、詳細不明のまま物語の幕がおりた。

これだけ解っていても、引き取り人不明となれば「行旅死亡人」と言われる。私は、「行旅死亡人」と言うのを知っているつもりだったから、タナカさんの物語は、事前の予想とは大違いだと驚いた。兄の話では、名前と住所を事故現場の死体から見つけることは難しいし、後の処理は大変なのだそうです。1950 年代という不安定な社会状況と、「行旅死亡人」の存在は結びつくものと思っていたので、「タナカチズコさん」のこの静かな展開は、「無縁社会」と言われる時代の象徴かと思う。

タナカさんは、これだけの物を残しているのに、何が問題なのだろうか。〈奇怪極まりない話〉といわれるから、何がどう奇怪なのかわからないまま、ミステリー小説っぽくなって、「行旅死亡人」のイメージは衣替えをした。

わからないことだらけで、話の行き先が見えない。ただ、〈本題は先にある〉と書いてある。ああ“ずる一い！”手だ。

尼崎東警察署が相続財産管理人に太田吉彦弁護士を選任した。そこから記者さんの追跡記述が始まる。

広島の出身かもしれないというところで目が覚めた思いだ。物語に地元の地名が出てくると、途端になんとなく親しみが生まれる。広島の沖宗さん。

〈異様な事件〉と言われても、何が異様なのか。この素材を基にして、いかなる事が想像できるかという記者さんの想像力が、謎を作るわけだ。私の想像が素材の話と一致したのは、錦江荘の名前が、鹿児島に由来するだろうという一点だけだった。

広島の沖宗姓が中心になってきたので、なんだか急に身近になる。と同時に、北朝鮮という国名が出てくるし、星のマークや、よど号ハイジャック事件の関連まで窺えて、「行旅死亡人」という言葉がどこかへ飛んでしまった。森永のミルク中毒事件まで登場する。

「たんくん」と名付けたぬいぐるみがいたこと、子どもの写真があったことで、彼女の実在の呼吸を感じさせられた。

探し出した事実は、市議員沖宗正晃の母の妹であること。謎めいたタナカチズコさんの身元が判明し、「行旅死亡人」ではなくなった。遺体の鑑定結果も、本人と認定された。

ここからが本題のようだ。死者の人生を追うこと。そのかけがえのなさにふれること。それが書きたかった中心なのだろう。

千津子さんと姉は広島市内で専売公社に勤務。1982 年尼崎に居住。千津子さんの妹四女のアキコさんは東広島市在住だが、幼い時の思い出しかなく、どんな人だったかのエピソードはない。川尻町小用にしても東広島市にしても、私のすぐ傍の町だ。

幼なじみや同級生が川尻町にいて、中学卒業後 70 年経っても気にかけていた。中学の同級生シマエさんは〈一人がさえんかったろうな〉と呟く。シマさんの呟きが温かい気持ちを伝える。チズコサンを探す記者に、多くの人はあたたかかった。

社会的孤独であり、真空のように透徹した孤独であっても〈人間の足跡、生きた痕跡は、

必ずどこかに残る。そう、たとえ行旅死亡人でも、である）記者の感慨である。千津子さんの記事は配信され、記事には反応があった。

所持金や遺品の意味はわからないままだが、行旅死亡人ではなくなったのだから、1年かけた記者魂のなし得ることだと感嘆する。しかし読みにくい。そこで、私の友人の娘さんが雑誌記者をしているのを思い出した。読んでいた途中から、記者の親としての気持ちになったら読みやすくなった。

こんな、前のみえない事柄にとりつかれて、大阪から広島や東京へと、右往左往しているのを1年も観ている訳だ。この記事を書き、配信までこぎ着けた二人の記者の思いも、親として察しられる。

解ってしまえば、数ページの結論に要約されてしまう。一人一人が生きた内容は、他の人からは、そういうものかもしれない。

人一人が、70数年生きて来て、誰にも繋がらず、誰の記憶にも残らず、いなかった者の如くに地上から消えていく事へのわだかまりがスタートだ。「無縁社会」はあり得ない。ただ、人智では知ることができないので「物語」にならないだけだ。この地上で、「無縁」と言うことはあり得ないのだとチズコさんが語る。

課題本『ある行旅死亡人の物語』 三行感想

◆【 ZK 】

人とのコミュニケーションが大切だと実感していると毎月考えさせられてきましたが、人との関係を断って一人で死んでいった方のルポでした。

そしてお金を使わずに残して。

いったい何なために生きていたのか？本人にとっての生きがいは？知りたかったです。

◆【 Sちゃん 】

もしかすると、私も「行旅死亡人」になっていたかもしれないし、なるかもしれない。

人生の選択によっては誰にでも起こりうる物語と覚悟して読み進める。ぬいぐるみと一緒に微笑む写真が物語る。田中千津子さんにも田中竜次さんとの幸せな瞬間（とき）があったのではないかと。莫大なお金も竜次さんとの思い出が詰まっていた使えなかったのではないかと。読者の想像力をかきたてる。「謎」は多いが武田惇志・伊藤亜衣両記者の「死者への尊厳」は確かなものであり、小説ではなく渾身のルポルタージュであった。

『ある行旅死亡人の物語』を読んで

◆【 YA 】

行旅死亡人という言葉も意味も、今回の課題本で初めて知った。官報に載った数行の女性行旅死亡人の記事に通信社の記者の目に留まり、同僚と二人で女性の身元を追跡したノンフィクションだ。

ある程度の取材が出来たとき、通信社内で前編が話題にのぼり、デスクが「記事に出す意義はどこにあるの？」「社会的な問題提起になるのか？」と。

私はデスクが少々本を出すことに逡巡しているのではと感じた。この時記者二人の内の一人が、既に 8 千字の原稿を書いており、又積極的であり、読んだデスクが許可したのかと思っている。

記者の取材力や、記者魂はやはり尊重すべきものがあるのだろう。

最後まで読み終えて、結構複雑な気持ちになった。

数奇な人生を辿らざるを得なかった人や、表沙汰に出来ない、したくない人の身元が洗いざらい判明するというのは、少し心がざわつく思いがある。

40 年も同じアパートに住んでいた千津子さんが何故家族と連絡をとらなかったのか、何故姉妹に自分の存在を知らせなかったのか、とても歯がゆい。彼女には、重い重いものがあつたのだろうと。

ホッとしたのは、出身地の小学校の仲良しの同級生の一人が、千津ちゃんはどうしているのかと、何十年も案じていたことだ。行旅死亡人の存在が年に、600 人から 700 人もあることにも、驚いている。

◆ 【 JM 】

初めて読んだのは広島本大賞受賞後の 2023 年 11 月である。ミステリーを読むような感覚で読んだ。現金 3400 万円余を残して死んだ老女はいったい誰なのか・・・わくわくしながら読み進めた。その女性の身元、生い立ちは 2 人の若い記者によって明らかにされたが、多額の現金を持っていたにも関わらず何故質素な（風呂のない古いアパートで質素の域を超えている）生活をしていたのか、まるで身を隠しているような暮らしぶりだったのかは分からずじまいだ。

最後には必ず（そうでないものもあるにはあるが）謎を解き明かしてくれるミステリー感覚で読んでいた私は、期待値が大きすぎてがっかりした。結局はこの老女の人生は想像するしかない。

この度「読書会の課題本」という機会を得て再読した。結局は分からないことが多いまま終わるということが分かっているので、初読とは違う感覚で読むことができた。2 度も 3 度も同じ本を読むのなら、1 冊でも多く読みたい私は、あまり再読はしない。

再読して、この若い 2 人の記者の熱い思い、エネルギーに感嘆させられ、この熱い思いに応える人々の優しさに胸を打たれた。人と交わろうとしない、面倒ごとには関わりたいくない人たちが多い現代で、老女の残した印鑑から辿り着いた親戚の方々、故郷の同級生の方々、若い時同じ職場で働いていた方、皆さん親切で暖かい。世間から身を隠しても、覚えていてくれる人がいる。懐かしんでくれる人がいる。再読後は「千津子さん、よかったね」と声をかけたくなった。再読することによって、初読とは違う感想をもてたり、気づきがあったりすることに新鮮な驚きをもった。

6 月 15 日の中国新聞の 33 面には「進む孤立 無縁遺骨増加」の記事がある。親族が受け

取りを拒むケースがほとんどだが、年によっては「行旅死亡人」の遺骨が 1、2 体あるそうだ。また、同日 9 面には『「ひとり死」時代 無縁遺骨にしない』という記事もあった。今や「ひとり死」は珍しくもなく、終活情報を周りに知らせることの重要性が書かれていた。「人間、どう生きるか」は大切なことだが、「どう死んでいくか」もこの高齢時時代には大切なのだ。

この本を読んで「人間の足跡、生きた痕跡」は必ずどこかに残る・・・そんな当たり前のことを強く感じた。はたして、私は人の記憶にどのように残るのだろうか、私の生き様がそれを決めるのだと思う。「なりたい私になれていますか？」という昔のコピーを思い出した。

◆【 T 】

2020 年 4 月尼崎市のあるアパートで女性が亡くなった。彼女は長い間そこで暮らしていたが、彼女の生活や過去を知る人がなく、警察の捜査でも身元が判明しなかった。官報で彼女についての記事を見て、共同通信社の記者二人が身元調査をしていった話なのだが、そこには多くの謎があった。

彼女は誰なのか？ 右手指は、なぜ欠損しているのか？

部屋にあった 3400 万ものお金はどのような経緯で手に入れたものなのか？

なぜ 必要最低限のつながりだけで、隠れるように生活をしていたのか？

賃貸借契約書に書かれている〈田中竜次〉とは誰なのか？どこに行ったのか？

部屋に残されていた印鑑「沖宗」から、広島県の呉市の小用出身ということが判明した。記者ならではの着眼点もあり、日本専売公社の定期昇給のための内部文書までたどり着いたのはすごいと思った。そこにあった沖宗千津子さんの名前を見て〈人間の足跡、生きた痕跡は必ず残る〉と信じて調べた記者の執念に感心した。

調査には限りがあり、お金のことや男性の田中さんのこと、何故このような生活をしていたのかは判明しなかった。

「一人の死者の人生を丁寧に追うって、本当に大切な仕事だと思いますよ。」「路上ですれ違ったような、はたまた電車で隣り合ったような一人ひとりの人間の内にも、それぞれの物語があり、それぞれの風景が広がっている。」と考える記者たちの、人を見捨てない、一人ひとりの人生を大切に思う誠実で真剣な思いが取材を受けた人たちにも伝わり、ここまでの調査ができたのだろう。

自分の存在を消して生きてきて千津子さんにとって、分からないままの方が良かったのではないかという思いもあるが、甥や姪の子の写真や「沖宗」の印鑑を大切に保存していたのは、千津子さんの複雑な感情＝懐かしい、会いたいでも会えない＝のような気がするので、故郷に帰れたのはよかったと思う。

読んだ後、千津子さんの行方が分からなくなっ、行方不明者届けなどは出されなかったのだろうか？もし出されていたら、もっと早く身元が分かったように思う。戸籍はどうなっていたのかな？年金手帳に田中千津子と記されていたそうだが、戸籍がなくても手帳はもらえるのか？などなど疑問に思った。

◆【KH】

行旅死亡人という語に全く予備知識もなく、他の参加者がおっしゃったように、旅行？と見紛うくらい。にも関わらず、パソコンでするっと変換されることに驚いた。いわゆる、行き倒れの死亡者のことを指すのだなと、読み進めるうちに理解できた。

3000万円あまりの現金をしかも、自宅の金庫に残したまま。身寄りや、戸籍の情報なども全くなく、部屋に残されていた遺品は、謎めいた星型の紀章など。想像力をたくましくすればいくらでも憶測で妄想は広がっていきそう。おそらく、公然と使ってはいけないお金だったのだろう。宝くじにでも当たったのだろうという、警察関係者の話も、あまりほじくり返したくない…ヤバさが臭ってしまう。とにかく、身元は綺麗に判明し、お骨は沖宗家のお墓に収まったのだから、何もいうことはない。のだ。

ただ、私の心に残ったのは、川岡シマエさんの「一人がさえんかったろうな」という言葉。「さえん」とは広島弁で「さみしい」「残念」「パツとしない」などの意味を持つとあるが、こんなに言い得て妙な言葉があるだろうか。しかも戦争直後の小学6年生から中学3年まで(時代が許さなかったかもしれないが、淡い夢に胸をときめかせたであろう多感な時代)をともに過ごした「旧友」を、懐かしむ暖かい気持ちで、まさにこの一言に凝縮されているなど胸を打たれた。時代や、状況、地域性。激動の時代に、恐らくはみんな翻弄されたであろう、そんな中での静かな、平凡な日々。シマエさんは多くを語っていないが、瀬戸内の(川尻の)穏やかな海辺で過ごした千津ちゃんとの懐かしい思い出は、東京からの突然の訪問者とのやりとりをきっかけに、鮮やかに蘇った。そう、中学卒業以来、一度もあっていない、千津ちゃんとの思い出は、シマエさんの胸にしっかりと残っていた。その事実にとどろき着いた、記者2人は、どんなにか心癒されただろう。読んでいる自分もそうだった。すぐに自分の私的な思い出話にそれてしまうのは、自分の悪いくせ(誰かに私の限界と言われたことがある)けれども、なぜか思い出したのは、実母がなくなった葬儀場で、20年ぶりくらいに再会した従姉妹との会話。「会おうと思っても、それも許されず。“思かてのさんやった”」と。折しもコロナ禍で、母がなくなる前の1年間、帰省も広島への訪問もはばかれ、母とのやりとりは、ほぼ毎日の5分にもならない電話のみだった。その辛さを従姉妹に伝えるのに、思わず口をついて出たのは、“思かてのさん”→ただ心配するばかり・案ずるばかりで、何も実際の行動が起こせず、辛い。というような意味あいのカゴンマ弁だ。幼い時に兄弟のように遊んだ従姉妹を目の前にして、するっと出てきた鹿児島弁の言い得て妙な感じに、我ながら驚いた。そう、肉体に刻まれた“言葉”でなければ、ピッタリと言い当てることのできないものがある。それこそ方言かもしれない。そう、どうしているのかな、元気であるのかなと折に触れ、案じ続けていた(次第に思いはさらりとしたものになっていたかもしれないが)シマエさんだからこそ、呟けた一言だなと。私の気持ちはこの一言に動かされたのだ。

◆【MM】

田中千津子という人が多額の現金を残してアパートで孤独死した。田中千津子名義の通帳や年金手帳は残されていたが、住民票は抹消されており身元がわからず引き取り手もい

ない。

官報を流し読みしていた記者が行旅死亡人の桁外れに多い所持金に興味を持って調べてみると、田中千津子は沖宗千津子であり、年齢も年金手帳に記されている年齢より12年早く生まれていた。著者である2人の記者の丁寧な取材、亡くなったアパートや女性のルーツである広島に何度も足を運ぶ熱意には感心した。手掛かりになるかどうか分からないことでもとにかくあたる。田中千津子が残していた沖宗姓の印鑑から沖宗の家系図を作っている人のブログを見つけ、広島に聞き込みに行くようになり、沖宗千津子の核心に近づいていく。ネタになるのかもわからず、仕事をしながらの取材や得た情報をまとめたり、記事にするまでの時間と労力は膨大なものだろう。

しかし、沖宗千津子であることが判明し遺体の引き取り手は見つかったものの、女性がなぜ12歳もサバを読んで田中千津子として生きていたのか、部屋の契約者「田中竜次」は何者なのか、沖宗千鶴子さんは結婚して男の子がいた、という同級生の話はどうなったのかなど不明な点もまだある。86歳で死んだ女性の部屋にあった多額の現金、安い部屋に過剰なセキュリティ、ベビーベッドと大きなぬいぐるみも不自然で気になる。そして指を詰める大怪我をしても労災を断り、歯の治療も保険証がいない特殊な歯科医にかかるなど、田中千津子としての痕跡を残さない女性の強い意志も感じる。だいたいなぜ田中千津子の住民票が抹消されていたのだろうか。そんなことがどうやって起こるのだろうか。

わからないことだらけなので年代別に整理してみる。

1945年 田中千津子生まれる(沖宗千津子は1933年生まれ)

1989年 年金手帳に保険者になった記載(田中千津子44歳・沖宗千津子56歳)

1995年 住民票抹消(田中千津子50歳・沖宗千津子62歳)

私の想像では 沖宗千津子は田中千津子として生きていた。そして人に言えないことをしていた。でもいつから？そして田中千津子さんはどこへ行った？？なぜ住民票が消された？？読書会の時にミステリーじゃないか！と一人で盛り上がっていたが、どこに結末をもってくればいいのかさっぱりわからない。沖宗千津子さんがくも膜下出血で亡くなったという事実があるのみだ。田中千津子さんはどこに行ったのだろう。